

個性重視の原則と道徳性の育成とのかかわりについて

茂 木 喬

On the Relationship between the Principle of Attaching Importance to Individuality and the Cultivation Up of Morality

Takashi MOGI

現行の学習指導要領においても「個性を生かす教育の充実に努めなければならない」と謳われている。この個性重視の原則と、道徳性の育成を重視する道徳教育とのかかわりについては、どうなっているのか。個性とは全ての事柄にかかわるものという原則に立ち、生命への畏敬は人間にとって知り得る対象ではないとする立場から考察した結果、幸福や快適さが人間の求めるものという結論に達した。

また、学校、家庭、地域が一体化して豊かな体験に根ざした子育てを行うことが大切で、道徳は「実践」されてはじめて意味を持つという結論にも達した。

1. 人生の大原則

われわれ人間は、誰でも僅か一個の命を与えられ、しかも、一回限り有効という厳しい条件の中で、辛うじて生かされている存在である。当然ながら、たった一個の命を万が一にも壊してしまうと、絶対に元に戻すことは出来ない。

命はどこから頂いたかとか、誰から頂いたかとか、なぜ頂けたのかとか言う質問には、答えられる人はいない。人は誰も物心がついてから自分の命について考えるが、それ以前のことや生まれる際のことは、記憶にないためである。

したがって、人間は、誰でも自分に直接かかわる現在の状況、目の事実から、あらゆる認識や思考や態度決定のスタートを切らなくてはならない。複数の人間がいると、見解の相違があっても当たり前でもあるが、それを防ぐには、十分なコミュニケーションが必要である。しかし、これはそう簡単にいく話ではないとも言える。

我々は、見解の相違というものを拒む訳には行かないが、また同時に、その原因をも理解し、最適の解決策を講じる必要もあろう。例えば、人間は、それぞれの集団が持っている文化の中で育ち、その中で生活をしているとも言える。

文化の中では、宗教の要因も大きく影響する。例えば、欧米の文化を根本において動かし

ているものにキリスト教がある。欧米の社会では、日曜日を休日と考えるのが当たり前である。また、社会的な面では、民主主義というものが大きな意味を持つ。市民の自由、平等、博愛などは非常に大切にされるべきものである。

反面、イスラム教の社会を見ると、どうであろうか。イスラム文化では、休日は、当然にも、金曜日である。また、民主主義といったものには余り大きな意味は感じられず、むしろ、普段の生活を通じて良きムスリムになろうとする意欲が強いため、生活と政治とは余り大きくかかわってはいないかのようにも思われる。

このように、社会生活や文化を取り上げても、それぞれの地域や文化や集団の持つ違いには、非常に大きなものがある。文化の違いと言うものは大変大きな力をも持つ。但し、元を正して言えば、人間は、一人一人皆個性が違っているのである。しかも、一人一人の個性は、あらゆる面で、それぞれに異なっているのである。

個性の違うもの同士が平和に暮らしていくには、「個性を生かしつつ、共に生きる⁽¹⁾」道德というものが必要とされる。すなわち、「個性的で共に生きる道德⁽²⁾」が実践される必要がある。それは、個人同士の場であろうと、集団同士（例えば国家同士）の場であろうと、全く同様に必要とされる事柄と言えるのである。

個性とは、あらゆる面の全ての事柄にかかわるものであると、先ほど述べておいた。その理由は、一人一人が名前も違えば、体の大きさや形、その状態や動きをはじめ、今居る場所、どれだけの時間そこに居るのか、なぜ居るのか、何をして居るのか、どんな気持ちで居るのかなど、あらゆる面で個人差が非常に大きいからである。

しかも、その人の個性というものは、決して決まりきったものではない。世の中に変わらないものなどはないが、人の個性もまた、時の経過とともに変動する。変化する意味、伸びる意味は、適切な指導の有無によっても異なる。

変化を指導する人が自分か他人かなどには関係なく、TPOに応じた個性の変化は重要である。そして、その指導に当たることも、心への影響の仕方や個性の生かし方などを踏まえた上で、重要な話とならざるを得ない。

伸びる意味という点に関して言うならば、心豊かな人間こそが、自分を最大限に伸ばし得ると言えよう。人生を広い心で受け止め、環境の変化にも幅広く対応し、生涯にわたって学び続けていく態度が求められるからである。

しかし、問題の解決という点から言うならば、問題の解決ということと未解決ということとは、意味の上では全く同じことであるとも言える。なぜなら、問題は次々と続いて起こっているものであり、我々の対応が適切であったか否かということについても、我々が確信がもてるような状況は、来そうもないからである。

この様に見てくると、我々は自分自身の人生についてさえ、さっぱり分かっていないとい

うことが明確になる。自分の個性だって、次から次へと変わっていつているのである。人生の原則とは、よく分からない点にあるとも言えよう。

2. 生命の一回性

人間は僅か一個の命しか持っておらず、その使用回数も一回きりであると述べた。そうであるなら、我々は、その時その時、一瞬一瞬を、大切にかつ一所懸命に生きる必要がある。だが、大切にと言うことと、熱心に言うことは違う。

例えば、健康については、運動、休息、栄養のバランスという問題がある。このようなバランスの問題といったことは、殆んど何事についても当てはまる。今、人生について言うならば、何も特定のことが人生なのではなく、ボーっとして無意識に過ごしている時間や、眠ってしまっている時間も、人生の内なのであるから。

このことは、人生において、何かを集中的に熱意を込めて行うのとは別の面にも、大切な問題があることを示すものである。バランスをうまく取るとは、例えば、人生において、経験や見通しや判断が、うまく行えるか否かという問題にかかわる。それは、究極的には、人間にとってはよく分からないことであるにもかかわらず⁽³⁾。

一度限りの人生を大切にすることと、いつも熱心に生きるということとは違うと述べたが、それは、例えば、人間にとって命は短いものであっても、普段は死について意識することなく暮らしているということともかわる。人間は、自分が生まれた時のことも分からないが、いつ死ぬかについても、全く分かっては居ないのである。

その意味でも、やはり、人間というものは大した存在ではないということが言えるだろう。そもそも、人間とは、自分自身のことについてさえよく分からない存在である上に、周りの条件や事情の変化に対しては、その動きに黙って付き従う以外に方法がないというほどの、無能で無力な存在というべきものなのであるから。

その点に関しては、我々人間が、主体性などと偉そうに言ってみたところで、どうにもならないことかも知れない。人間が主体性を貫いたところで、一体誰がそれを高く評価してくれるのだろうか。むしろ、人間以外の存在から見ると、人間の主体性などというものは、あっても無くても、全く構わないものなのかも知れない。

このように考えると、主体性などという問題はさておいて、自分が幸福に暮らせるか否かということが、人間にとっては大きな問題になるものと考えられる。もちろん、幸福を願っているのは自分一人だけではなく、他の人々も皆同じことなのであるから、自分の幸福と同時に他人の幸福についても考えるゆとりを持ち、お互いの幸福への気配りが出来るようであるならば、それに越した話は無いというものであろう。

このように、生命が一回限りのものであることは、人間が世界全体のことをよく分からな

いで居ることと相俟って、人間の生き方を、自分で微妙に味付け、かつその味を変えていけるように仕向けてくれるものであると言える。

3. 人間の幸福とは

普通、幸福とは、人間が快適に暮らせることを言う。すなわち、自分や人に対して幸福(よさや快適さ)をもたらすことを有意義と考え、そのように自分や人にとって実際に意味や価値のあることを積極的に行っていこうとするのである。

この場合の人とは、自分のかかわりのある人、すなわち自分にとってのいわゆる隣人のことと考えて頂きたい。普通の人間であるなら、自分と全くかかわりのない人のことまで、考えて上げるようなゆとりはないはずであるから。

幸福とは、快適に暮らせることだと述べたが、実は快適にもいろいろな種類のものがある。自然の快適さもあれば、人間関係の快適さもある。自然の快適さといっても色々で、気温、湿度、天候などから、身の回りの色彩、音響、着るもの、触覚、味付け、香りなどに到るまで、ありとあらゆるものが考えられるのである。

普通ならばとても快適とはいえないような状況、例えば着ているシャツがぐっしょりと濡れているという場合であっても、もし着ている本人が、自分は今までスポーツをしていたのであるから、シャツが濡れているのは当たり前である。何も不快に思う必要はないと考えているなら、それだけの話ということにもなるのである。

一般に、幸福についても、どれが本当の幸福だとか、絶対の幸福だとか言うことはあり得ない。どんなに立派な着物を着ても、必ず幸福を感じるかどうかは分からない。汗びっしょりで、今は裸で居るのが一番だと思う人には、立派な着物などは何の価値もない。これと趣を等しくする話は、限りなく沢山考えられるであろう。

幸福に関しては、実際に意味や価値のないことを考えたりやってみたりしても仕様がなない。我々が用いる幸福という言葉は、我々が今それを欲している、あるいは、今それが役立ち有意義であるという場合においてのみ、意味を持って来るのである。我々は、ただ単に、言葉の上だけで暮らしている訳ではないのであるから。

このように考えてくると、我々にとって意味があるのは、現実の動きに応じた話であるということになる。この論文の最初において、「自分に直接かかわる現在の状況、目前の事実から、あらゆる認識や思考や態度決定のスタートを切らなくてはならない⁽⁴⁾」と述べたのも、正にこのためなのであった。一度限りの人生を生きていくに当たって、我々は、無駄な時間を過ごして行く訳には行かないのであるから。

我々は環境の変化に応じて様々な対応を取るが、それは人生が一回限りということと深くかかわっている。我々の幸福とは、非常に微妙に形作られ、感じ取られるものである。人生

が何回でもやり直しが効くなら話は別になるが、そうでない以上、いつでも一回限りと自覚し、少しでも幸福にと考えざるを得ないのである。

4. 現実とのかかわり合い

我々が生きているということは事実であって、非現実の世界に遊んでいる余裕はほとんど無いといってよい。「我々にとって意味があるのは、現実に応じた話である⁽⁵⁾」と述べたのも、このことと関連している。我々は現実の世界の中で生きているのであり、現実の世界以外のことは如何ともし難いというのも、また事実である。

では、我々が事実の中、現実の中に生きているということと、我々が現実の中において一人で成し得ることは殆んど無いということとはどうかかわるのか。簡単に言うなら、人間の無力さを言っているだけの話である。現実の状態を変えたり、現実の変化を先取りしたりする力は、我々には、殆んど全く与えられていないのである。

現実の状態を変える力を持たないということは、人間が自分の弱さを認めなければならないということである。我々は、お腹が空いたから食べる、眠くなったから寝る、疲れたから休むということを繰り返しているだけかもしれない。しかし、それでも、現実を変えて行くことに繋がる面はあろう。ただ、その意味が余りにも小さいため、結果的に、現実を取り仕切ることとは無縁の存在と見られてしまうのである。

人間が現実の中で生きているというのは確かな事実であるから、また、人間は現実の中以外に生きることは出来ないのであるから、現実を動かす力を持っていても不思議はないのではないか、と言う議論も成り立つ。誠にその通りであり、人間が力を持っていても全く構わないのである。ただ、如何せん、現実には余りにも多くのものがかかわっており、人間がかかわる余地は殆んどないというのが実情である。

我々人間は、現実の中にどっぷりと漬かり込み、現実以外のものとかわることは殆んどあり得ないといってもよいほどである。しかし、逆に、現実の側からこれを見る場合には、宇宙全体あるいは世界全体というものが余りにも大きすぎるため、人間のいる場所がを見つけ難いというのも、また真実というべきであろう。

それは、人間がどこに視点を置いて見ているかということともかわる。人間が非常に自己中心的であるために、自分たち人間以外のものを余りよく見ていないのではないかということも気になる。人間が世界を広く見ることが出来るならば、その思うところや考えるところが大きく変わってくることも期待できるであろう。

現実とのかかわり合いを考える時に、もし、人間が広く世界全体を対象にしてもものを見ることが出来るならば、今まで述べてきたことは、人間が自己中心主義にこだわりすぎた結果で、特に問題にする必要もないことかも知れない。

しかし、そう言い切れるほど、人間は利口ではない。人間が現実とかかわる場合には、人間中心、自己中心となるのが、今までの常であった。

5. 個性重視の原則

今、「特に問題にする必要もないことかも知れない⁽⁶⁾」と述べたのは、人間が、宇宙や世界を全体として広く対象に取り上げることが出来るようになった場合の話である。実際には、人間は人間自身の問題をかなり大きく扱うことになるため、個性重視の原則や、道徳性の育成といったことを、問題にしない訳にはいかない。

前から述べているように、人間の個性とは、一人一人の人間のあらゆる面、全ての事柄にかかわるものである。すなわち、人間一人一人について、価値観とか、考え方とか、性格とか、好みとかを見ても、それぞれに異なっているのである。

各人が異なっているというのは、自然なことではあるが、また考えようによっては、大変結構なことでもあるといえる。なぜなら、個人個人が、臨機応変に、その場に合った行動をとることが可能になるということだからである。

個に合った対応を取ることが出来るというのは、個性をよい方向に伸ばすことが出来るということにも繋がる。もちろん、よい方向というときの「よい」の中身が問題とはなるが、ここではそれをあまり深く追求する必要もないであろう。一般に考えられているような、広い意味での「よさ」と考えて頂いて十分であろう。

それよりは、この説の最初でも触れた、人間の自己中心性の問題の方が大きい。人間の自己中心性とは、人間が、自分自身の問題を大きく扱うことを指しているが、それはもう既に当たり前のこととされている事実なのでもある。

確かに、人間が自己中心的にも物を見るのは当たり前でもある。誰も、人間以外のものとの結婚などは考えないし、人間の言葉で人間以外のものと話をしようとは思わない。電柱と結婚する人も、壁と友人になる人も居ないのである。

我々が考える個性重視の原則とは、せいぜいその程度の話である。個性という場合には、普通ならば人間の個性について考えるのであり、世界中のあらゆるものの個性について考えるなどということは、人間には出来ない相談である。

だから、個性の重視という場合には、当然のこととして、我々一人一人の、また人類の中における様々な種類の集団の個性を重視することに努める必要がある。それだけでも、実際の人間にとってはかなり大変な作業になるであろう。

また、個性を考えるには、TPOへの対応を重視する必要もある。個性とは、単独では存在し得ず、TPOに対応し移り行くものだからである。

このように見てくると、個性重視の原則を考える場合には、柔軟なものの見方が必要になっ

てくる。そしてまた、柔軟性と共に、プラス思考も併せて大切にしたいと考える。人間は、幸福を求め、実現しようとする動物だからである。

6. 人間の完全性

人間の中には、完全だと言えるような人は居るのだろうか。それはまず無理というべきものであろう。なぜなら、完全な人間とは、結果的には神様を指すことになってしまうからである。完全な人間とは、人間のことを考えるのみならず、世界中のあらゆるものについて、平等・対等に取り扱うことを必要とするものである。

残念ながら、そういう人間が居ないことは、はっきりしているといってもよいであろう。なぜなら、普通の人間であれば、自分自身についてすら、生まれた時のことや物心が付くまでの間のことは、全く分かっていないのであるから。

そうであるなら、我々は、「完全な人間は世の中に一人も居ないのだ⁽⁷⁾」ということを大前提として、分かりきった事実として、話を進めるほうがよいのではないか。そのほうが手っ取り早く、余計なことを言わなくて済むからである。

個性を伸ばすことの大切さとか、道徳性を育成することの重要性とかについては、十分お分かり頂けると思う。人間は自己中心性が非常に強いものであるし、人生は一回限りという縛りが非常にきついことも関連して来るからである。

我々の人生が一回限りであることは、人生をよいものにするために、精一杯の情熱的な努力を傾ける必要があることにもなる。人間としては、誰だって自分のことは一番よく分かるが、もしも人のことまでよく分かるように成れるなら、この上なく結構なことである。そうなれるなら、ある程度の苦労も厭わないかも知れない。

それは同時に、心が温かく、他人に対しても懸命の努力をしようというほどの人間であるなら、その人間は信頼するに足るということにもなる。なぜなら、そのような人は、人間としての心の幅が大きく広がっていて、結果的に人々に安心感を与え、人との間の信頼感を高めていくということが予想されるからでもある。

人間関係を改善することに気を配り、努力を忘れない人ならば、言うことなしである。そこまでは行かなくとも、他人が一番喜ぶようにして上げ、結果的に人生を共に楽しめるなら、それもまた素晴らしいことなのではなかろうか。

実際には、人間の完全性というものは存在しない。しかし、現実的には、素晴らしいと言えるような人は結構沢山居るのではないか。人間の完全性について考える時には、やはり、人間の自己中心性などを考慮する必要があるだろう。

人間が、一歩でも自分の完全性に向かって近づくためには、それなりの努力が必要とされる。自分の経験や努力によって、他人と共に楽しむことが出来るようになるなら、その人の

人生は素晴らしいものであるということが言えよう。その意味で、広い知識と教養を身に付けることは、とても大切なことであると言える。

7. 道徳性の育成

道徳性の育成に関しては、様々な言い方がなされる。心の教育というのも、それに当たるであろう。心の教育とは、一般的に言えば、人間として大切なことをきちんと成し遂げられるように教育をしようということであると考えられる。

そのため、一方ではコミュニケーション、すなわちかかわり合いの教育が大切にされ、他方では社会性を豊かに養う教育が必要とされる。コミュニケーションとは、かかわり合いを深めることで問題解決策の一端を担うものである。社会性を養うとは、他人と協力する力を養うもので、もちろん自分自身をも伸ばすものである。

心の教育に関して言うなら、柔軟性というものが非常に大切になる。我々人間は、常に現在から将来へと向かっており、その場その場でTPOを弁えて行動する必要があるからである。言ってはならないことは決して言わないのである。

ところで、道徳性の育成について考える場合にも、人間中心の立場に立っていてよいのだろうか。そのようなことを考える場合には、宇宙や世界の全体について正面から相手にすることが必要なのではなかろうか。

このことについても、世界の中心は何かとか、世界を動かすものは何かということが問題になる。結果から言うと、我々にはその答えは分からない。なぜなら、地球一つを見ても、人間にはその全体を見通す力はないのであるから。

我々は、人間を中心として生活してはいるが、人間はこの世界の中心となるような存在ではない。完璧な人間などはもちろん一人も居ないのであり、ただ、環境の変化に従って動いているだけということもよく分かっているのである。

人間はTPOに対処するため、時としては別人のようにもなる。そのような時には、人間の同一性などはいったいどこにあるのかと思うほどである。そういう時、人間は、TPOなどは自分の埒外のこととして、死ぬまで新たな状態に適応しようとするのである。動きながらの対応に向け、豊かな感性と努力を傾けながら。

我々は、視点の大部分あるいはその中心を人間に置くことによって、自分をも伸ばしつつ、夢や目標に向かって適切に対処しようとしている。道徳性の育成を考える場合には、人間中心の立場に立たざるを得ないため、これはやむを得ないことである。

しかも、道徳性の育成ということを考える時には、人間や個性の持つ多面性とか、生命や人生の一回性とかいった原則的な話も考慮しなければならない。もちろん、コントロールとコミュニケーションといった側面も含めてである。

道徳性の育成に当たっては、人間中心主義の立場に立って、個性を伸ばす工夫が必要となる。道徳性の育成とは、そのようなものである。

8. 個性重視と道徳性育成とのかかわり

個性重視の原則と道徳性の育成ということとは、実に様々な面においてかかわり合っている。それは、丁度、環境の変化に対応しては、時間的な要因も空間的な要因も、共に大きくかかわり合っているというようなものである。

まず、第一に、個性の重視も、道徳性の育成も、共に、現実とのかかわりが深いという点で一致する。個性とは、個人の持つ全てを指すと言ったが、それは、個々の人間が現実を持っているあらゆるものという意味である。従って、個性を重視することと現実を重視することとは、事実上同じことを言っているのである。

また、道徳性の育成ということも、現実の重視とかかわりが深い。道徳とは、人間が自己中心的に生きる中で考えられるものであるためといっても同じことである。すなわち、道徳は、実践されて初めて意味が出てくるのである。

第二に、個性重視と道徳性育成に関しては、「人間としての在り方生き方に関する教育⁽⁸⁾」ということも、忘れてはならないポイントである。人間は、自分自身の生き方を常に考え続けているほどの個性的な存在であると言えるし、道徳性の育成も、個性の重視ということを抜きにしては考えられないものだからである。

したがって、道徳性の育成とは、道徳的実践力を行動に移すことにより狙いが達成されるものと見る事が出来る。道徳性の育成とは、道徳的実践力を育成するのみならず、それを実際の行動に移させることを含むものである。

その際には、個性の重視ということが、ものを言うことになる。道徳的な実践力とは、人それぞれの個性に応じたものであって、それを実際の行動に移すのも、各人の個性的な行動の仕方を抜きにしては考えられないからである。

第三には、個性重視についても、道徳性の育成についても、その指導者としては、一般的には学校、家庭、地域社会の三者が挙げられる。この三者が一体となって協力し合い、豊かな体験に根ざした子育てを展開できるならば、子供たちが将来を担う期待の星として、大きく伸びていくことが考えられることにもなる。

ただ、現実的には、学校、家庭、地域社会の三者が平等ではなく、学校が多く役割を担うことが多い。しかし、学校は、子供が中心の世界である。実際には、子供が大人を動かすということは、殆んどあり得ない。そうであるなら、学校が世界の中心になるようなことは止めた方がよい。大人中心の家庭や地域社会が本領を発揮すべきである。主たる影響力は、家庭や地域社会から学校へと向かうべきである。

学校が個性重視の原則を捨てることとは別である。学校は、子供の個性を尊重すればよい。ただ、力を持つのは大人だということを言いたいのである。

第四に挙げたいのは、個性重視の原則も、道徳性の育成も、共に豊かな体験活動を通じて大きく伸びるということである。先ほど、個性重視の原則も、道徳性の育成も、共に「実践されてはじめて意味が出てくる」⁽⁹⁾面があると言ったが、その意味で、豊かな体験活動を通じての実践ということは、大きな意味を持つ。

豊かな体験活動は、人の心の中に、思いやりや社会的ルールといった規範意識やコミュニケーション能力をも、育て上げてくれる。体験活動を盛んにすることは、自己存在感や自己有用感を培う指導上の工夫であり、また、人に対して、大きな夢や未来への希望をもたせるための手立てでもあると言いたい。

このように、個性重視の原則ということと、道徳性の育成ということとは、様々な面で深くかかわり合っているものなのである。

9. まとめ

ここで、今までの流れをもう一度振り返りながら、まとめてみることにしたい。

まず、個性の重視ということに関しては、一人一人の存在の仕方が皆違うからこそ、我々が存在する意味があると考えられる。そうであればこそ、コミュニケーションを通じて共に社会を支え合って行く態度を培うと共に、心情、判断力、実践意欲、態度などの道徳性を育成して道徳的な実践力を養おうとするのである。

一方、道徳などは、大して重要な話ではないという見方も、確かに出来る。道徳の内容はTPOによって大きく変動するし、この世界は人間が中心になっているわけではない。それは誠にその通りで、それで良いとも言えるのである。

しかしながら、道徳的な心情や判断力、さらに実践意欲や態度などが育たないと、道徳の実践は難しい。その意味では、道徳の真に実践的なテーマは、「個性的にして共に生きる道徳」⁽¹⁰⁾なのではないかと思われるほどである。

人間が幸福を求めているのは確かである。しかし、その具体的な内容となるとまさに千差万別で、人により時によって様々に異なる。したがって、我々としては、現実の意味を持つような幸福の求め方をする必要がある。現実に必要な意味を持つか否かが、人生が一度限りであることと大きくかわるものだからである。

我々は、現実を左右する力は持ち合わせていない。しかし、人間が、個性重視の原則を取り上げる場合には、現実の中の一部を問題としている。それは、道徳性の育成を考える場合にも、まったく同様に当てはまる話である。

人間の中には完全な人というものには存在しない。しかし、道徳性の育成という点から言え

ば、我々は、完全な人間を目指して、道徳性の向上を図っているとも言える。もちろん、大それたことを考えている訳ではないのであるが。

このように考えてくると、個性の重視も、道徳性の育成も、共に現実の問題と深くかかわり合っている。我々が、実際には、人間を中心として世界を見、自分を中心として問題の解決を図るということを前提としての話である。

現実と深くかかわり合うというと、夢に乏しい話と受け止めるかも知れないが、決してそうではない。個性の重視も、道徳性の育成も、豊かな体験活動を通じて大きく伸びて行くという点で、大いなる希望を与えてくれるのである。

以上、見てきたように、個性重視の原則も、道徳性の育成ということも、共に、人間中心の世界の中ではありながら、人間の生活をよりよく幸福にしてくれるものである。我々は、それに甘えず、おもねず、また、臆せず、脅えず、堂々と、個性を発揮しつつ、一歩でも自分の完全性に近づけるよう、努力すべきである。

註

- (1) 平成 17 年 11 月 19・20 日に、千葉敬愛短期大学において開催された第 66 回（平成 17 年度秋季）日本道徳教育学会大会のテーマは、「個性を生かし共に生きる道徳に向けて」であった。
- (2) 上に同じ。
- (3) 「1. 人生の大原則」の最後の段落を参照のこと。
- (4) 「1. 人生の大原則」の 7～8 行目を参照のこと。
- (5) 「3. 人間の幸福とは」の最後から 2 番目の段落を参照のこと。
- (6) 「4. 現実とのかかわり」の最後から 2 番目の段落を参照のこと。
- (7) 「6. 人間の完全性」の最初の段落を参照のこと。
- (8) 文部省「高等学校学習指導要領 第 2 章 第 3 節 公民 第 1 款 目標」（平成元年 3 月）を参照のこと。
- (9) 「8. 個性重視と道徳性育成とのかかわり」の 3 番目の段落を参照のこと。
- (10) 上記(1)に同じ。